

Title	活動報告
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2011
Jtitle	Newsletter Vol.15, (2011. 3) ,p.7- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000015-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

活動報告

タイトル	開催日・会場	主催・共催・企画	企画者	講演者・参加者
第1回実験美学セミナー 描くことの進化と発達の起源を探る～チンパンジーとヒトの幼児の描画行動から～	12月6日 三田キャンパス 東館4階セミナー室	脳と進化班 共催：第127回 バイオサイコシン ポジウム	川畑秀明	齋藤亜矢(京都大学野生動物研究センター/東京藝術大学)
医療人類学の最前線ⅠV:ケア・基準・味覚	12月11日 三田キャンパス南館5階 ディスカッション・ルーム	哲学・ 文化人類学班	宮坂敬造	Annemarie Mol (University of Amsterdam) 鈴木晃仁(塾内経済学部)、宮坂敬造、モハーチ・ゲルゲイ (哲学・文化人類学)
アリストテレスの学問的知識の構図	12月13日 三田キャンパス 南館2B35教室	論理・情報班	納富信留	高橋久一郎 (千葉大学)
第4回 京都大学ー慶應義塾大学グローバル COE 共催シンポジウム「トランスナショナルな心・人・社会」	2011年1月9日 京都大学時計台記念館2階 国際交流ホールⅠ&Ⅱ	全体	子安増生 渡辺茂 山本淳一	子安増生、内田由紀子、赤上裕幸(京都大学)、杉浦章介、 山本淳一、佐治伸郎、濱雄亮(慶應義塾大学)
Keio-USF Joint Seminar	1月28-29日 南フロリダ大学	国際教育研究プロ グラム	小嶋祥三 渡辺茂	四本裕子、加藤真樹、一方井祐子、八賀洋介、 渡辺茂(脳と進化班)
Aesthetic Lecture on Shadow by Dr. Roberto Casati	1月25日 三田キャンパス 東館6階G-SECLab	哲学・ 文化人類学班	遠山公一	Roberto Casati (National Center for Scientific Research (CNRS), Paris)
平成22年度「大学教育改革プログラム合同 フォーラム」ポスターセッション	1月25日 秋葉原アキバスクエア 屋内スペース	全体	渡辺茂 小嶋祥三	小嶋祥三、安藤寿康、皆川泰代(遺伝と発達班)、 モハーチ・ゲルゲイ(哲学・文化人類学班)
プロジェクト科目報告会	2月7日 三田キャンパス 大学院校舎325B	全体	杉浦章介 渡辺茂	プロジェクト科目履修者(9名)
2010年度若手研究成果報告会	2月8・9日 三田キャンパス 東館6階G-SECLab	全体	渡辺茂	特別研究教員、非常勤研究員全員(28名)

研究員紹介

濱 雄亮



2010年10月より、非常勤研究員となりました濱雄亮と申します。医療人類学の視点から病いをめぐる理念と実践について、主に1型糖尿病の当事者や関係者たちへの聞き取り調査・文献調査に基づいて研究を行っております。ここでいう「理念」とは、患者会・医療従事者・行政機関によって措定される「理想の患者像」です。「理想の患者像」は、患者以外の者から寄せられるまなざしに対する応答でもあり、病いの社会的かつ双方向的な

構築についての非常に重要なデータです。そこで、患者会主催のイベントにおける配付資料、患者会の会報誌、講演会などを資料として用いています。その上で、その資料を「実践」についてのインタビュー資料と照合することで両者の関係を読み解き、病いによる人間関係・社会関係の成立と変容の動態を解き明かしたいと願っております。

三宅博子



2010年10月より、非常勤研究員として哲学・文化人類学班に参加させて頂いている、三宅博子と申します。これまで、発達障害や神経難病を持つ人たちの即興音楽療法の実践・研究に取り組み、2010年3月に神戸大学で博士号を取得しました。西洋近代型音楽療法はこれまで、セラピストによる音楽的介入とその効果という単線的な発展の論理を暗に前提としてきました。この点を批判的に再考すると共に、人間と音楽、そして環

境との関わりの多様な可能性へ向けて開かれた臨床音楽学を構想することが現在の研究テーマです。本グローバルCOEでは、「音楽するmusicicking」ことを巡って異なる論理と感性を持つ者同士が、いかにして協働の音楽を成り立たせていくのかについて、様々な異質な要素を取り込みながら意味を生成し、変容するプロセスとして捉えることを試みます。どうぞよろしくお願致します。

村井忠康



知覚における概念の役割

2010年10月より非常勤研究員としてお世話になっている村井忠康です。専門は、18世紀ドイツの哲学者I・カントの認識論と現代の知覚の哲学になります。カントは、知覚という感性の働きに対して概念という知性の要素がどのように寄与しているかという問題を、初めて自覚的に引き受けました。今では、概念主義と呼ばれる知覚論によってその問題意識は引き継がれています。しかし概念主義は、知覚を不当に知性化していると

してしばしば批判されてきました。私の現在の関心は、こうした批判から概念主義を擁護する手立てをカントのテキストのうちに探ることにあります。これは、カントが日常的経験だけでなく美的経験においても大きな役割を与えた想像力の意義を再考することにもつながりました。今後は想像力の分析を通じて、日常的経験と美的経験のあいだの連続性・非連続性といった問題についても考えていきたいと思っています。

石川哲朗



2010年10月より、非常勤研究員として人文グローバルCOEでお世話になっております、石川哲朗と申します。本塾の特別研究教授である茂木健一郎君の指導の下で博士課程に在籍し、認知神経科学を専門として研究に励んでおります。私のテーマは創造性と一回性、もうすこし平たく言えば、ひらめきや“Aha!” experienceの認知神経基盤を解明することです。ひらめきというのは、論理的思考や感性的なプロセスのあわいに

あるような知性のきらめきであると考えられますが、まだ十分に理解されていないその謎を明かしたいと希求しております。このような壮大な目標を立てつつ、本拠点では脳と進化班に所属して行動実験や脳機能計測を用い、曖昧な視覚刺激がある瞬間ぱっとひらめきによって見えるようになる興味深い現象を手掛かりに、その背後にある認知メカニズムを実験的に調べています。ご指導ご鞭撻の程、よろしくお願いいたします。